

額田先生より拝受の本 夢想神傳重信流 木村栄寿範士著

「英信流業手付及び口伝」より

英信流抜刀の事

是重信翁より段々相伝の居合然者を最初に教えべき筈のものなれ共先大森流は初心の者覚え易き故に是を先に教えるといえり。

(抜刀兵法伝来の後書きに)

「目録には夢想神傳英信流抜刀兵法と有。是は本重信流結うべき筈なれども長谷川氏は後の達人なる故に是も称して英信流と掲げたる由」とあり。

本来、重信流前業として行われていたものである。長谷川英信は弓馬の名師範であり、人材衆に優れて器用であった。重信流抜刀術を好み修行してついに名人達者の域に達し、人読んで長谷川流域は英信流と称するに至った。

当流に就いて、抜刀初心の心持に次の如く諭してある。

- 一、当流は開きて息を続跡大森流に替わる事なし
- 二、業仕損じ半途にて止まる有打ち込み杯気に足らざれば又冠り打ち込み直す有慎むべし
- 三、抜き付け打ち込み共夫々切っ先のきける様心掛けるべし若し業仕損じなば十本流して跡にて幾度も抜き直すべし初心の修行には十本の業を一本と心得て初本より終わり抜き打ち辺糸筋の切れざるように工夫あるべし

横雲

右足を向こうへ踏み出し抜きつけ打ち込み開き足を引きて先に坐したるとおりにして納める也。

深山には あらし吹くらし みよし野の 華か霞か 横雲のそら

「理合」

山に横雲の棚引く象。相手を山に、山に棚引く横雲を抜き付けた剣に譬えた。

正面に対し居合膝に坐る。一人対一人、中間間合い、屋内。

居合膝は左足踵の上に臀部中央部を乗せ、右足を立てて坐る、右足先は膝より前へ出さず。両手は自然に軽く握り両腿に置き、両脇を軽く締め背を正して、打ち向かう相手を見定める。

抜き付けは、相手の首又は乳通し、右足を大きく踏み出して抜き付ける。 剣先はわずか下がるも、刀はほぼ横水平にして山にかかる横雲に似る。

左膝を進め、追い込む如くして横霞で攻め、止める事なく冠り右足を踏み出して打ち込む。

開き、納め終わったとき左足踵に腰を下ろす。

虎一足

左足を引き刀を逆さまにして抜いて留め抜きて打ち込みあと上に同じ。

猛き虎の 千里の歩み 遠からず 行くより早く 躰るあし引

「理合」

足並み崩さず、一夜に千里を走る虎足を以って使う。

正面に対して居合膝にて座す、一人対一人、極真近、屋内。

相手先に下に抜き付けるところを、左足を引き、刀を逆さまに刃を下にして抜刀、相手の刀と切り結ぶ。

このときの虎足と切り結びに口伝あるも筆に尽くせず。

相手刀を払い上げ、巻き込む如く冠り、左膝をつけ右足にて打ち込む。開き、納める。

稲妻

左足を引き敵の切って掛かるを拳を払って打ち込み跡上に同じ。

もろともに 光と知れと 稲妻の あと鳴雷の 響知られず

「理合」

吾が刀刃を、暗夜に走る稲妻に形容した。

正面に対して居合膝、一人対一人、中間間合い、屋内。

相手八双より冠り打ちかからんとする瞬間、左足を引き相手拳目掛けて下より抜き付ける。相手拳は当流極意也。

払い捨て（勢中刀に同じ）左膝をつけて右足にて打ち込み、開き、納める。

浮雲

右へ振り向き足を踏みもちたはずみ（左足の歩み）腰をひねり抜きつけ左の手を添えて敵を突き倒す心にて右の足を上は拍子に刀を膝へ引き切っ先を後へ跳ね上げ冠り膝の外へ打ち込み跡上に同じ又刀を引いて切っ先を跡へはねずして取って打ち込む業もあり。

麓より吹き上られし 浮き雲は 四方の高根を 立包むなり

「理合」

相手を山にえ、乳通しへ横一文字に抜き付けた吾が体勢を浮雲に譬^{たとえ}た。

正面に対し左向きに坐す。一人対一人、極真近、屋内。

右に坐った相手が、柄を取らんとするを左手を刀にかけ、左足を左に開き立ち上がりつつ、柄を左に開いて外す。

相手今度はコジリを掴むを、

右に振り向き、左足を右足先前に踏みもち立たし時、充分腰を落とし両足はTの字になり、左手は刀諸共右腰部に刀刃外方に向け巻き返し、コジリを掴んだ手を振りもぎ、右手を柄に掛け抜刀の体勢となる。

腰を十分に捻り乳通しに横一文字水平に抜きつけたとき、刀刃に全力を集中する。抜き付けた位置低く、従って両膝を曲げ腰低く左膝裏に右膝頭がつく。充分腰を捻る為自然と足裏が返る。

左足を踏み、左手を刀に添え、相手を突き倒す心持で、右足を開きながら刀水平刃筋通り引き倒す。

左手を刀背に添えたまま、刀先を相手に突き刺す勢いにて、又元に返すようにして右斜め上を取って返し、間合いを計り右膝を着く。この間、左手は自然と柄を握り、目付けは相手を見詰めてそらさず。

左足を右方へ踏み替え、相手を踏みつける。

振り冠り腰車又は腰通し目掛け、左膝外に打ち込む。

山下嵐

右へ廻り向こう左の足と右の手を柄と一处にして打ち倒し抜き付け跡前の通り但し足は右足也浮雲と足は相違也。

高根より 吹き下ろす風の 強ければ 麓の木々は 雪もたまらず

「理合」

相手を山に譬え、裾野を攻撃する業である。

正面に対し左向きに坐す。一人対一人、極真近、屋内。

両手を刀に掛け、左膝軸に右に振り向くや、刀を返し刃を下に向け、右足で鏝に手をかけた相手の右手諸共踏みつけ、柄にて打ち据える。

すかさず、柄頭で相手の目鼻の間（眼関落し）を打つや両手を右腰に取る。

相手のけぞるを、充分腰を左に捻り、右袈裟に抜き付ける。

左手を刀に添え、右足を右斜め後方へ開き、刃筋の通り押し引き倒す。

浮雲の如く、刀を取って返し（或は後に跳ね上げ）、立ち上がり間合いを考慮に入れ、冠りながら左膝を右足踵付近につけ、右足を踏み出し相手の首に打ち込む。

岩浪

左へ振り向き左の足を引き刀を抜きて左の手切先へ添え右の膝の外口突き膝の内に引き跡は山下嵐の業に同じ。

行く舟の 舵取り直す 間もなきは 岩尾の波の 強く当れば

「理合」

巖に当る怒涛を我が身に譬え、怒涛が巖を打ち砕く象を表す。

正面に対し右向きに坐す。一人対一人、近間合い、屋内。

刀に手をかけ腰を浮かし、相手に抜き口の見えぬ様、右方に抜き出し。

右足を軸に左に向き替え、左足を引き右踵付近に左膝をつける。この時、刀は右膝外に取り、刀刃は下方に左手を右膝外切先に添え、切先を膝より前に出さない。

右足を力強く踏み出し、相手下腹部を突き刺す。

左膝を軸にして左足を開き、右足を後方に引き、刃筋の通り手前右膝内に刀を引く。

左手を離し、切先を後に跳ね冠りつつ立ち上がり、左足を大きく引き、間合いを考慮に入れ、右足踵付近に左膝をつけ冠り、右足を踏み出し相手の首に打ち込む。開き、納める。

鱗返

右に向き居って左回りに向こうへ抜きつけ左の足を引き冠り打ち込み開き納める也。

瀧津なみ 瀬上がる鯉の 鱗は 水関うえで 落る口なし

「理合」

鱗は魚をいう。魚が泳ぐさまを刀法に現す。滝登り、瀬昇りにも魚は止まらず、岩あれば身を翻し向きを変えて泳ぐ理也。

正面に対し右向きに坐す。一人対一人、近間合い、屋内。

刀に手を掛け立ち上がり、左に振り回り左足を引いて、中腰にて切っ先外れに相手の首又は顔面を払うつもりで抜き付ける。

抜き付けた刀は止まる事無く、手を返し、右足を進めながら左方に薙ぎ左膝を着け冠り、右足を踏み出して打ち込む。

波返

鱗返しに同じ後へ抜き付け打ち込み開く納める後へ廻ると脇へ廻ると斗相違也。

あかし湯 瀬戸越並の 上にこそ 岩尾も岸も たまるものかわ

「理合」

浪が打ち寄せ、引き返す有様を刀法に現したもの。

正面に対して後ろ向きに坐す、一人対一人、近間合い、屋内。

後に振り廻り抜き付け、あと鱗返しに全く同じなるも、動作は鱗返しよりも大きく使う。

瀧 落

刀の鞘とともに左の足と一拍子に出し抜いて後を突きすぐに右の足を踏み込み開き納めるこの業は後口コジリを取たる所也故に抜くときにコジリにて当る心持有。

瀧津瀬の 崩るる口の 深ければ 前に立添ふ 岩もなきかな

「理合」

瀧の落ちる有様と勢いを具現したもので、後ろを突き下す時、刀身が瀧の落ちる形態になる。

正面に対し後ろ向きに坐す、一人対一人、近間合い、屋内。

相手後ろよりコジリを取りかせ**抜まいと押し出すを**、左手を刀にかけ立ち上がりつつ左手を左横、左足を左方に開き相手を見る。

左足を強く前に踏み出し、刀を振る如くして胸元に搔くる如くして胸元に囲い込み刀に手をかけ、コジリを取った相手の手を振り放す。

次の瞬間、左足前に右足を踏み出し、刀を上^{かぎ}に抜き頭上に振り翳す。

このとき、左足先を相手に向け、体は横向き顔は相手を見定め間合いを計り、剣先は相手の頭上につける。

左足に全体重をかけ、瀧の落ちる勢いにて、刀を直下相手の頭上に突き下す。

このとき、右足は十分に跳ね上げ、全力を刀先に集中する。

間合いを考慮し、右足前にて**低い姿勢で打ち込む**。

左膝を着き、開き、納める。

抜 打

大森流の抜き打ちに同じ

*但し、柄攻めの業もある。

完